連載

あのマチ このムラ ・地域おこし活躍中

No.43

音更町の事例

―人と大地がひびきあい躍進する快適都市おとふけ―

音更町の概要

（一）位置と自然

音更町は北海道の東部、十勝平野のほぼ中央にあり、南は十勝川をへだてて帯広市及び幕別町に、北は士幌町、西は鹿追町、芽室町、東は池田町に接し、東部の南北に走る「オサルシナイ丘陵」を除いては概ね平坦である。音更川を中央に士幌川、然別川が北から貫流し、いずれも十勝川にそそいでいて大地を潤し、各種農産物の生産に適していて全道では屈指の穀倉地帯となっている。全体の広さとしては東西二三・二㎞、南北二二・九㎞で、面積四六六・〇九平方㎞の不正形な菱形をなしている。

また、本町の気候は海洋の影響が少ない内陸性で、冬は零下二〇℃を超えるほど寒さが厳しく、夏には三〇℃を超える日も続くなど、夏、冬の寒暖の差の大きいのが特徴である。しかし、秋にはいわゆる「十勝晴れ」と呼ばれる澄みわたった晴天の日が続くなど、過去の転勤で四年間を隣町の帯広市で過ごした経験のある筆者には大変住みよいところという印象が今でも残っている。

なお、雄大な十勝平野の中央を流れる十勝川のほとりには「平原湯の里十勝川温泉」がある。この温泉は湯量が豊富なことと、植物性モール温泉―通称「美人の湯」として広く知られ、四季を通じて観光客でにぎわっている。

（二）歴史

本町の歴史は古く、安政五年（一八五八年）に幕末の探検家松浦武四郎が十勝川を回った時に、既にこの地に足を踏み入れていたようである。

明治十二年（一八七九年）には、

音更町役場庁舎

十八年に町制が施行されて現在に至っている。

本町の現在（二〇〇五年国政調査の速報値）の人口は四二、四五一人となり、前回の国政調査時（二〇〇〇年）に比較し八・三％の増加率となった。第一回国政調査が行われた大正九年当時の人口は三、四二三世帯、一八、六三〇人だった。昭和四十年二万人を超えた後、宅地造成が進められる中、人口は順調に増加し、昭和五十五年には三万人に達している。平成八年、人口五万人を超える広島町と石狩町（現在の北広島市と石狩市）が市政を施行したことにより、本町は全道町村で最も人口の多い町となった。

町名の「音更」は、アイヌ語の「オトプケ」（毛髪が生ずる）から転訛したもので、音更川と然別川の支流がたくさん流れているところから付けられたといわれ、町内に流れる河川に密生していた化粧柳の木が、まるで髪の毛の吹き乱れる様からこの名が付けられたという説と、河川の支流の流れがあたかも風に乱れた髪の毛のように吹き荒れていたという二つの説がある。

岩手県人大川宇八郎（後述）がこの地に定住を始めたといわれている。その後、入植者も増え、種牝馬の飼育や水稲作が行われるようになり、明治三十四年に音更他二村戸長役場が設置された。そののち五年後、明治三十九年に二級村制が施行され、大正十年に一級村、そして昭和二

●十勝開拓の先覚者　大川宇八郎

安政二年（一八五五年）、岩手県九戸郡軽米村（現軽米町）で酒蔵業の長男として誕生。

やがて家業の暖簾が傾き、家運を盛り返すために単身北海道に渡った。

当初はアイヌの人々を相手に、彼らが狩猟した鹿や熊の皮などの産物を、十勝川を下って大津（豊頃町）まで運び、それらを売って、塩・油・日用雑貨などを仕入れてアイヌの人々に渡すといった交易を行っていた。

明治十六年（一八八三年）の秋、大津の漁場で知り合った伏古村アイヌコタンの有力者の長女と結婚したころから、狩猟資源枯渇による商取引の不振を考え、本格的に農牧業に切り替えたとされている。

（三）産業

本町の基幹産業は農業である。日本有数の大型畑作農業地帯を形成しており、小麦、大豆、小豆などの品目で作付面積、収穫量ともに日本でトップクラスとなっている。

本町の産業別就業人口を総務省統計局「平成十二年国政調査」でみると、農業を中心とする第一次産業が三、〇〇七人（一五・二％）、主に農業に関連した製造業を中心とする第二次産業

が四、四三二人（二二・四％）、卸売・小売飲食業やサービス業を中心とする第三次産業が一二、三五九人（六二・四％）となっており、基幹産業の農業をはじめとし、豊かな自然を背景とした商業、工業及び観光などの調和のとれた活力あふれた産業の発展を目指す町である。

音更町農業の概要

（一）農業の経営規模と産出額

本町の基幹産業である農業の概要について平成十六年度版で紹介してみよう。農家戸数は七八四戸（うち専業七四六戸）、農用地面積二一、七〇五㌶（一戸当たり面積二七・七㌶）のうち作付面積は二〇、二六〇㌶となっている。作物別には、小麦七、三九七㌶、豆類三、九〇一㌶、てん菜三、五三七㌶、馬鈴薯二、〇五九㌶など畑作物四種で一六、九〇三㌶（八三％）を占め、前述の通り自他ともに認める大規模畑作農業地帯である。また、酪農・畜産も盛んであり、乳牛九、〇七八頭、肉牛（専用種）二、八六六頭等を飼育している。

音更町内秋まき小麦のほ場風景

農業産出額で見ると、総生産額二四〇億六、九一一万四千円のうち、小麦六七億五、四三四万七千円、てん菜三九億七、二六四万七千円、豆類二八億七、三三四万一千円、馬鈴薯三一億九、四八九万八千円の畑作物四種で一六七億九、五二三万三千円（総生産額の七〇％）、酪農・畜産で四四億五、四三六万七千円（同一九％）である。

ここで、十勝の新たな産地の顔として忘れてならないものがある。今や長いも、ごぼう、大根など根菜類を主とした国内有数の野菜産地としての顔である。昭和六十年以降畑作の輸入自由化の影響や価格の低迷などを背景として、畑作四品に次ぐ「第五の作物」として野菜が積極的に導入されてきた。本町も昭和五十九年から長いも作りがはじまり、昭和六十年にはブロッコリーの栽培が始まった。このころの十勝の農協は、いうまでもなく野菜の取り扱いでは後発農協であり、その販売は生食用馬鈴薯の供給力を利用して道外移出等販路拡大を図っていったのである。しかし、取引市場に野菜が定着するにつれどうしても単独農協では解決し得ない悩みがあった。それは、消費地の「定時・定量・安定供給」に対する強い要望に応えられないという点である。つまり、物量的な問題と集出荷貯蔵施設などの取扱体制的な課題である。だが、十勝の農協は独特の合理的な発想のもとで、これらのハンデを克服していったのである。その取組の一例については後ほど「第五の作物（野菜）へのチャレンジ」で紹介したい。

音 更 町 農 業 の 推 移

（単位：ha、 t 、頭、千円）

区分 ＼ 年			昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
農家戸数			1,257	1,147	962	851	825	813	800	784
農用地面積			21,776	21,558	21,758	21,723	21,720	21,718	21,709	21,705
1戸当たり面積			17.3	18.8	22.6	25.5	26.3	26.7	27.1	27.7
作付面積		水稲	345	291	178	143	78	59	32	7
		豆類	4,051	3,767	3,584	3,555	4,050	3,637	4,121	3,901
		馬鈴薯	2,559	2,299	2,550	2,236	2,210	2,180	2,068	2,059
		てん菜	3,516	3,573	3,742	3,627	3,310	3,356	3,593	3,537
		小麦	6,817	7,220	6,172	7,246	7,326	7,402	7,149	7,397
		飼料作物	7	3,180	2,936	2,952	2,717	2,636	2,598	2,503
		野菜	288	531	613	627	530	498	549	508
		その他	437	539	1,177	423	397	374	368	348
		計	18,020	21,400	20,952	20,809	20,618	20,142	20,478	20,260
家畜	牛	頭数	9,362	10,737	10,297	9,574	9,052	8,953	9,114	9,078
		乳量	33,014	39,991	42,246	41,952	42,406	43,533	44,291	43,047
	馬		214	295	302	280	270	250	248	248
総生産量	農産	水稲	453,561	344,025	208,822	164,947	35,934	19,527	8,318	5,432
		豆類	3,127,749	2,146,286	3,440,272	3,258,331	2,589,831	3,005,171	2,685,365	2,873,341
		馬鈴しょ	3,776,324	3,635,300	3,428,779	2,659,174	2,795,262	3,349,151	3,072,017	3,194,898
		てん菜	4,024,488	3,583,922	3,704,573	3,290,414	3,515,220	3,626,067	3,747,780	3,972,647
		小麦	6,099,093	4,895,233	3,971,312	6,107,054	6,085,531	7,245,238	7,239,386	6,754,347
		その他	695,264	2,179,086	3,112,751	2,209,160	2,358,364	3,058,115	2,997,857	2,814,082
		小 計	18,176,479	16,783,852	17,866,509	17,689,080	17,380,142	20,303,269	19,750,723	19,614,747
	畜産	乳代	3,035,378	3,056,821	3,191,544	3,177,646	3,189,208	3,299,756	3,340,309	3,215,823
		その他	121,278,200	1,378,241	884,170	1,038,258	903,015	965,700	1,111,240	1,238,544
		小 計	4,213,578	4,435,062	4,075,714	4,215,904	4,092,223	4,265,456	4,451,549	4,454,357
	総 計		22,390,057	21,218,914	21,942,223	21,904,984	21,472,365	24,568,725	24,202,272	24,069,114
農外収入（米生産調整）			1,024,279	520,000	1,571,473	764,959	739,671	682,548	730,468	266,777
生産性	1戸当たり収入額		18,627	18,953	24,443	26,639	26,924	31,059	31,166	31,041
	1戸当たり所得額		6,519	6,937	8,066	11,195	11,307	12,927	12,965	12,927
	1人当たり所得		2,608	2,569	2,987	3,950	3,985	4,508	4,450	4,355

資料提供：音更町

（二）日本を代表する豆の生産地

豆は馬鈴しょや小麦等とともに北海道を代表する農産物である。今や、十勝は「豆の国」と呼ばれるほど豆類の栽培が盛んであるが、その中でも、本町は作付面積と生産量が全国一位という、日本を代表する豆の産地である。

●音更町の小豆

日本で小豆の栽培が本格的になったのは明治以降であり、十勝で栽培が中心となったのは明治三十年代後半から大正初期にかけてといわれている。その中でも本町は、主に「エリモショウズ」と「きたのおとめ」が約二、〇〇〇㌶作付けされ、生産量ともに全国トップクラスである。中でも「エリモショウズ」は冷害や病害虫に対して抵抗が強いことから主力品種となっている。その名の由来は、寒さに強く、品質が良く姿の良い小豆であることを、風雪の厳しい風光明媚な北海道の「襟裳岬」にちなんで名付けられたとされる。

小豆は連作がきかないため、広大な土地を有し、梅雨のない北海道十勝が適地であったといわれる。

《小豆のマメ知識》

マメ科ササゲ科属の作物で、大豆・落花生・緑豆を除く豆類の総称である「雑豆」の一種である。食習慣があるのは、日本、韓国、中国、ブータンなど。日本で栽培されている小豆のほとんどが赤色で、種子の大きさにより大納言小豆（粒長が四・八ミリ以上のもの）と、普通小豆（四・八ミリ未満四・二ミリ以上のもの）に区別される。

●音更の名がつく自慢の大豆

本町で初めて大豆が栽培されたのは明治十六年（一八八三年）のこと。馬鈴しょや麦よりも早かった。大豆の品種は約六〇品種あるとされるが、豆の産地・音更町で生まれ、音更の名がついている大豆がある。「音更大袖（おおそで）大豆」（銘柄名：音更大袖振大豆）である。町内の大豆作付けの約四〇％を占有し、主に豆菓子や納豆、豆腐などの原料として使われ、本町を代表する品種となっている。そのルーツは、昭和二十五年頃に遡る。

中音更の生産者（故人）が、試験栽培用として譲り受けたさまざまな青大豆の中から、良質で早熟だったものに注目し、その種子を選抜育成したものである。寒さに強く、冷害年の昭和四十一年以降急速に普及し、平成三年には、北海道から優良品種に指定されている。他の大豆と比べて粒が大きく甘みもあり、しかもイソフラボンの含有量が多いなどの特徴を持ち栄養価が高いことで知られている。枝豆に山形県鶴岡市の「だだ茶豆」や新潟県黒崎町の「黒崎茶豆」といった有名ブランドがあるが、素材としては面白い。

（三）第五の作物（野菜）へのチャレンジ

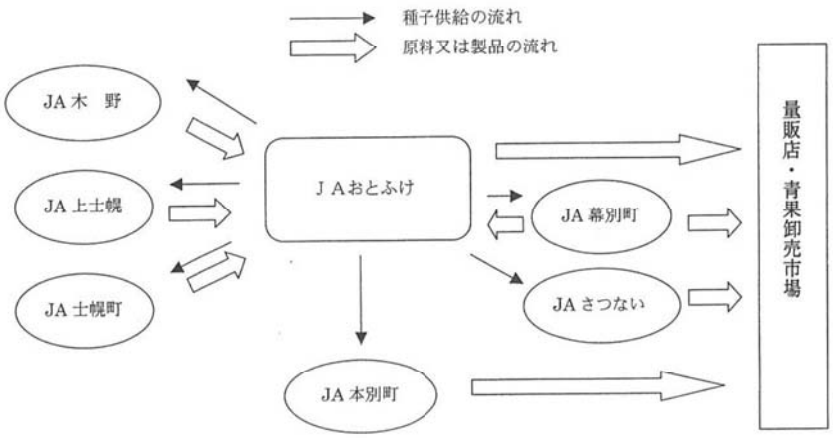
前述のとおり、十勝は昭和六〇年以降畑作四品目に次ぐ「第五の作物」として野菜作を積極的に導入してきた。特に長いも、ごぼう、大根といった根菜類では、今や北海道を代表する大産地に成長した。

その中にあって、「十勝中央青果団地運営協議会」は、平成

六年に園芸作物の生産振興に共通の認識を持つ自主的に参集した地域広域組織である。消費者ニーズの多様化により市場や量販店からは野菜の取り扱い品目の拡大が求められる一方、生産者の高齢化や労働力不足の進行、野菜施設の雇用労働力不足、資材費や輸送費などのコスト削減など、農協単独では解決しにくい課題も山積していた。その解決策として生まれた考え方が品目ごとに野菜施設の整っている（又は整えた）農協に集結するという「みなし広域」と称する独特の広域形態である。

先輩ブランドには、多少形態は異なるが音更町近隣の四町五農協が合同で行っている「士幌馬鈴薯施設運営協議会」があり、五農協分の馬鈴しょ（生食用、加工用、澱粉原料用）を士幌町農協に集結し出荷しているのが先駆的な内容としてあげられる。野菜としては、帯広市川西農協の「十勝川西ながいも」、芽室町農協の「芽室ごぼう」、豊頃町農協の「十勝だいこん」などがある。長芋などで実績を積んできた先発農協は、選別・貯蔵施設を保有し、労働力の軽減を図り、作付拡大と計画的な生産出荷体制を整備してきたが、更に物量を確保し施設の有効利用を図り稼働率を高めることにより生産コストを少しでも軽減したいというニーズが生まれ、一方で野菜導入を進めたいが取扱体制整備には時間を要する後発農協のニーズとが一致したのである。

当青果団地は十勝のほぼ中央に位置することから、広域産地名を「十勝中央青果団地」と命名、出荷する商品ブランドの総称を「十勝の野菜」とした。会員は、当初、音更町農協、木野農協、幕別町農協、札内農協、本別町農協の五農協でスタートした。



十勝中央青果団地の取扱体制（長いもの例）

もともとこれら農協が集結すると、長いも、ごぼう、大根、にんじん、かぶ、ねぎ、ブロッコリー、レタスなど、十勝管内はもとより他の先進産地に比較した場合、品ぞろいの面でも魅力ある産地になるとの期待も大きく、安定供給体制の確立による信頼確保と市場占有率の向上など、広域化による優位性の獲得を狙いとし結集したのである。

十勝の野菜（長いも）の出荷風景

まず皮切りに出荷用段ボールのデザイン統一により内外へのイメージづくりとアピールに努めるとともに各農協の集出荷所の現体制に則した共同集出荷体制を敷くことにより、人、施設、輸送手段等の効率化による流通コストの低減を目指したのである。その後も体制強化を図っており、平成八年からは、長いも、ごぼう、大根の三品目で共計販売を開始し、平成十三年に上士幌町農協、平成十六年には士幌町農協が加入するなど、発足から一〇年余りを経過し更なる充実期を迎えている。

（四）音更町特産センター

当センターは「ふるさと創成資金」を活用し、平成三年八月にオープンした。音更町の農畜産物や特産品の展示販売の場として、十勝はもとより広く地場産品のPRを行っている。

平成八年「道の駅」に指定されてからは十勝観光の拠点として、多くの旅行者が訪れており、都市近郊型の田園都市としての音更町のイメージの浸透を図り、地域の活性化に結びついている。

（五）音更町農業塾「年輪塾」

この「年輪塾」は本町が運営している。基幹産業である農業の持続的発展には後継者の育成が重要であるとの観点から、将来の音更町農業の担い手として時代に対応できる経営感覚を養い、地域のリーダー的な役割を担っていく人材の育成、担い手相互の連携強化等を目的に平成十一年度より開設している。農業者及び農業後継者、Uターン就農者などの四〇歳までを対象としている。一期二カ年であり本年度（平成十七年度）で四期目を迎える。これまで、一期目一八名、二期目一八名、三期目一七名の修了生（後継者）を送り出している。

活動の基本コンセプトは〝人づくり、仲間づくり〟である。経営、栽培技術等の農業の最新情報はもとより、環境問題、パソコン研修、英会話などの一般教養までテーマは幅広い。取材のため町の事務所にお邪魔した平成十七年十一月十六日は第四期塾生の入塾式が開催される日

音更町特産センター

だったが、新年度からは、塾生同士の話し合いで研修内容を決定する方針とのことであり、有意義な活動になるものと今後の発展に期待したい。

◆◆後　記◆◆

農業の国際化の進展、規制緩和の進行、農業構造の変化等に伴い、日本農業の再構築が求められている。政府・与党は平成十九年から品目横断的経営安定対策を導入することを決定し、その大綱が平成十七年十月に示された。この政策改革は戦後の農政を根本から見直すものであり、広範かつ大規模なものである。そのため、十勝の個々ＪＡはもとより十勝ＪＡグループひいては全道ＪＡグループが一丸となってこの政策転換に対応するべく、行政との連携のもとに地域農業振興システムの確立、担い手の育成、生産販売体制の確立などによる農家経済の安定を目指しているところにある。

十勝の農業は、広い耕地など自然環境に恵まれ、単位当たりの生産性は国際的にも最も高い水準にあるといわれており、我が国を代表する畑作・酪農地帯として大きく発展してきた。食料基地としての期待はこれからますます高まるものと予測される。その中核をなす本町において、その気候・風土に根ざした豊かで活力ある農業、農村作りが今後も進展していくことを念願してやまない。

最後に、用務お忙しい中、取材にご協力頂きました音更町はじめ音更町農協の皆様には心からお礼を申し上げます。

レポーター
（社）北海道地域農業研究所
特別研究員　和田好充